磐田市平和祈念式「平和への想い」

1945年８月６日午前８時15分。深夜零時過ぎに出た空襲警報も解除され、皆がほっとしていたとき。誰もがいつものように朝を迎え、食事をし、仕事をし、勉強をしていたとき。広島に原子爆弾が投下されました。
訪問の際に聞かせていただいたお話では、あまりの熱さに、水を求め、さまよう人々や、皮膚が焼けただれ、肉がむき出しになっている人々が大勢いたということでした。原子爆弾によって、地表に3,000度から4,000度に達する熱がもたらされました。また、木々や建物など、空間を遮るものはすべて爆風によってなぎ倒され、人々は直にその熱風をあびました。着物の模様がそのまま肌に焼きついた女性もいたそうです。初日に訪れた広島平和記念資料館でも、血にまみれた服、壊れた弁当箱などから、一瞬で多くの命が奪われたこと、生死をさまよって、人々が苦しむ様子がありありと思い浮かびました。
また、原子爆弾は大量の放射線も容赦なく爆心地にあびせました。見えない魔の手により、熱線から辛うじて逃れ、生き延びられた人も、次々と亡くなりました。その人たちは、日が経ってから髪の毛が抜けはじめ、歯茎から血が出るようになりました。やがて、皮膚に紫色の斑点が出始め、出血が止まらなくなったのです。そうして、被爆から一ヶ月以上経っても、苦しみから逃れられることなく亡くなりました。今もなお、放射能による後遺症のために命を落とす人々がいる、ということを知って、戦争が残した爪痕の大きさにおののくと共に、とても悲しく、やるせない気持ちになりました。また、平和記念式典に参加したことで、被爆した方々、その親族、知り合いの人々は、私以上に深く長く、悲しみ、悔やんでいるのだということを感じました。
けれども、私はその厳かな式典の中で、皆が過去を嘆き、悔やむばかりでなく、過去を振り返り、どのように未来へとつなげていくか、この歴史を、どのように次世代へ伝えていくか、を前向きに考えているという力強さも感じました。そして、私に、この訪問で学んだこと、考えたことをたくさんの人たちに伝え、歴史を風化させないようにしたいという思いが芽生えました。
私は、広島を訪問し、実際に被爆した建物を見るまで、広島が被爆地であり、日本が被爆国であることに、あまり実感がわいていませんでした。教科書の写真を見ること、インターネットで予習をすることと、実際に建物や資料を目の当たりにすることは全く違いました。感じる重みが違うのです。広島を訪れた人たちの中には、そのような思いをもった人たちが、少なからずいるのではないかと思います。だから、私は感じたことを忘れないようにするだけでなく、見聞きしてきたことをできるだけ多くの人たちに伝えていかなければならないと思っています。訪問先の一つである安田女子高等学校では、被爆桜がそれを伝えているということがわかりました。今、被爆桜は、樹齢70年を超え、いつ枯れてもおかしくない状態だそうです。接ぎ木をし、手間暇かけて植樹を行う

ことで、被爆桜を全国に伝えようとする取り組みへの姿勢は、記念式典で感じた人々の気迫と同じでした。

訪問は深い衝撃を受ける学びの連続でした。平和を願うからこそ、過去の歴史と向き合い、真実を伝えようとする人々の思いにこたえ、私たちにできる平和への行動を積み重ねていきたいです。そのためにも、何事も自ら深く学ぶ姿勢、身近にいる人を大切にする姿勢、そして、社会を広く見渡す目を今後の生活で養っていきたいと思います。

平成 30 年８月 15 日

代　表　　加藤　真智（磐田市立福田中学校）